

## P. ヴァイス「決闘」—混沌の自己解剖

古 賀 保 夫

### I

P. ヴァイスの Duell「決闘」(1951)は Der Schatten des Körpers des Kutschers「御者のからだの影」(1952) Abschied von den Eltern「両親との別れ」(1959) Fluchtpunkt「消点」(1960)と並んだ散文作品である。当初スウェーデン語で書かれ、独文で刊行されたのは1971年だから、独文による作品としては最も遅く刊行された散文である。

作品は一代で財産を築いた社長、社長の娘、その娘には義父の会社の在庫係をしているローベルトという夫がいるが、その娘は夫を捨てて地誌学者グレゴールの許に走る。グレゴールには女友達のヤンナがおり、ヤンナはまた同性愛相手にイネスという女性を持っている。これが作品の登場人物である。このほか娘の母親、兄弟などがいるが本当の登場人物といえれば上記六名にすぎない。そうして相互に交わされる言葉を通じ父と子、旧と新、安定と不安定が渦を巻く。ひとまとめにすれば混沌の中の人間像がある。ここで作者は人間とは何か、を故郷を持たず何物にも帰属することを許されぬユダヤ人としての自己存在の確認を求めている。(Ⅲの末尾参照)

旧新世代の差については社長である父が娘に向かって「お前の銀行口座を封鎖し、準禁治産者にすることもできるのだ」と家父長的に言うのに対し娘は「この家庭は泥沼だ」(91頁)と反発する姿にも現われている。その社長の安穏な生活の中には不安感情が潜んでいる。この個所が示すように作品の世界は没落する文化、崩れつつある世界に生きて行く人間を織り込(註1)んでいる。理性では掴み得ぬ感覚的なものとして描いた人間活写には無意味ささえただよわせている。その文体は硬質で、それがために混沌たる世

界が濃くなって、登場人物の言葉はシニズムをただよわせ、しかもその綾の中に自己存在を開陳している。

またこの作品に描かれた青春の人物像、没落、混沌の意識に押された青年像は作者が亡命的生活をし疎外された人生体験と無縁だったろう筈はない。かかる人生体験に対する感懐は、たとえば H. ヘッセがその自伝的青春を書いた「郷愁」ペーターカームンツィント Peter Camenzind (1904) の主人公が内面の道を求めつつも、最後は帰郷して村のために働く決意をする、といったものとは異なっている。また H. カロッサが「青春変転」Verwandlung einer Jugend (1928) で、主人公の魂の発展成長を描いたのと比べても異質である。それは同じ青春小説といっても、生まれながらに亡命者的にあった作者と、そうでない人間の世界の差であろうし、同時に住む世界とののっぴきならぬ対抗関係に投げられた者の違いであろう。この緊張した関係は、父と娘の対話において見れば、体制安定者と亡命者との対立に通ずる。

ここで亡命者としての P. ヴァイスを視座に置く必要に駆られる。ヴァイスは自伝的作品でつぎのように訳している。

Daß ich kein Deutscher, und väterlicherseits von jüdischer Herkunft war, erfuhr ich erst kurz vor der Auswanderung. (Fluchtpunkt : S.9)

私がドイツ人でないこと、またユダヤ系統が父方からのものであること、それは私が出国を前になって聞き知った。

Der unaufhörliche Druck, der von der Bedrohung ausging, das leise Grauen, das wir ständig im Hintergrund unseres Bewußtseins trugen, gehörte zu unseren Lebensbedingungen. (Fluchtpunkt : S.37)

脅迫から流れ出る絶えることのない圧迫、われわれが常住不断に意識の背後に背負い込んでいるかすかな陰湿さはわれわれの生活条件にさえなっていた。

この体験と「決闘」の筋は作品の基盤を考えると無関係でないことに気付かざるを得ない。さて女主人公レアは室内をグロテスクな足どりで歩

き肉体的なものを奔流させているのに対し愛人関係の地誌学者グレゴールはまるで冷たい思弁の中に沈潜している。このグロテスクな人間風景からして、生の不安が察知される。この個所はただ意味を解明するのではなく、不合理な場面の提出として読み取ってもよからう。

この対応関係は対照的な二人の姿であるが、ここに非合理的客観の存在を見る。女は「これまでの人生は破壊」と見なしている。男は女に対し無力化してくる。それは狭い意識に苦悩している男の自我であり、また一方女は恍惚境にまで自らを高めてくる。そうして精神錯乱の場の近くに立つ姿となる。この危機的状況をもたらしたものは何であろうか。非合理を超え得ない現代の文明のもたらした心的状況であることは一応認めてよいであろう。

現代は人間が自己自身さえ破壊しているということ、この動かし難いほどの境が登場人物の背後に存立しているのではないか、との問いを投げていると考えられてくる。ではこの危機を乗り越えるにはどうすればよいか。自己疎外の罅にはそれを打ち破れぬ壁が塞がっているのだろうか。それなら、その不倒の如き壁と世界にどう対処すべきであろうか。その壁の具体的存在内容は何であるだろうか。

(注1) Ich, untergehend in einer untergehenden Kultur. Wofür kann ich noch kämpfen, in einer zerbrechenden Welt? Gib nach, weich aus, laß dich sinken. Nein, kämpfe, schneide, schneide. Suche Klarheit, Verstehen... Lebe in deiner auseinanderstürzenden Welt. Nein, baue, baue aus Brückstücken... jetzt regten sich Wesen in ihm, füllten ihn mit ihrer Vergangenheit, ihrer Zukunft, seine Gedanken waren Gesichter, Körper, Hände, .... (S. 113)

## II

レアとグレゴールにとっては、ことにレアにあっては、その夫ローベルトは無価値に等しくなっている。レアはこの二人の男を自分の岩屋に縛りつけていると同然な身である。しかもレアが感じたもの、それは孤独 *Alleinsein* でしかない。自己存在を解明してくれるもの、そうしたものの意識化を探すが、どうしても見出すことはできない。<sup>(注1)</sup>

この心的状況は何を示そうとしているのであろうか。周囲が自分を理解できないからそれに業をにやして孤独に陥ったのか。また少数者が陥りがちな孤独の姿なのだろうか。いずれにしても、そこには合理的精神を受け入れる余裕のなさがある。虚無的な実存の現示があるのみとすれば、そうした内外の非合理さえ合理化し得ないものの存在に気付かねばなるまい。それは沼であり不可解な暗さとも映じよう。理性の及ばないものの存在が背後に迫っているということである。その迫っているものが個人的なものではなく、大きな社会的な力となって存在する時、その人間は非有として生きている。人間存在が否定されており、そのことが逆に現人生の証明となるような状況下で人間として存立している。それは自己矛盾であり、かつそれに苦しむ存在である。暗い谷間における苦悩の切迫であらう。

自己肯定か自己否定か、どの道を辿ろうとするのか。そうした現象を全否定するにしても、もし一步誤まれば退廃が待っている。分裂の中で余計者と見られて抑えられたままで生きるか。これは人間としての生活諸条件から離脱したものの中で、また不平等の中で生きる姿となろう。単純に理性を欠いた肯定ならば、その暗い背後を理解する姿は観念的な自己超克に転じ易いし、全人間的な解明には到達できぬだろう。というのは人間を制度的に、従って自己を相対化して見ることを拒否しているからに他ならぬ。かくて人間とは何か、と問うときの方法として知性をもって考えるべき姿勢のあり方をも提示しているのではないか。

そこで、そうした状況、条件の中で人間を開花させるには孤独 *Al-leinsein* の姿においてでなく、あくまでも人間が自らを破壊し、阻害している、危機を解剖することが要求されてくるだろう。近代人という姿をとっている弱い人間を根本から捉え直すことが課題となる。いまここに市民社会を持ち込んで追求しようとしても、それからさらに各世代が受けついで歴史生活に立ち入らざるを得ない。その歴史を振り返らなければ人間解釈は抽象的人間として堂々めぐりを繰り返した問答となろう。だから、ここに歴史的視点を考えあわせて作品と人間を追ってみよう。

作の筋は進んでレアの男友達グレゴールが自分の女友達ヤンナのところ

へ行く場面ではヤンナは二人で旅に出ろうとするのだが、そこではヤンナの父親が「私を見捨てることは許されぬ」DU DARFST MICH NICHT VERLASSEN と書きつける。そしてグレゴールと書きつける。そしてグレゴールと父親との争いが展開する。<sup>(注2)</sup>そこでグレゴールは、ある理念に襲われたような心に陥り、その理念が形象化され、それが自らに押しよせた心的状況になる。<sup>(注3)</sup>そして突然「生」の権利を主張する。しかしヤンナと同性愛関係にあるイネスの二人から束縛された雰囲気<sup>(注3)</sup>に落ち込む。そのとき自分のあり方はこんなものだと受けとめる。束縛、それも単数でなく複数による束縛感<sup>(注3)</sup>は錯綜した力の現象形態を表わしているのであろう。束縛されたものと受容する受身の自己規定は、自己でない自己を本当のあり方だとさえ思惟すること、であるがそうした自己実存を自認するのはいかなるものであろうか。その意識は正しく否定された有、つまり非有である。人間実体の実存的根拠の追求を続ければ、いかなる客体がかかる意識を形成したのか、という問いに進んでくる。この作品では作者の人生とそれを招来した歴史的なもの、身分差別の長い鎖がそれである。作者はドイツ語版の前書きに「亡命の歳月の間、孤独によって印された私の行為の結果」がこの作品だとし、自分の活動形成の場をこう認めている。

Duellen, das jetzt, 20 Jahre nach seinem Entstehen, in deutscher Übersetzung erscheint, ist ein Resultat der Isoliertheit, von der meine Tätigkeit während der Emigrationsjahre geprägt war.

ユダヤ人の苦痛、また差別を受ける側の人間、それは本人にとって自分自身が、ただ謂われない理由で人間に対立するようになった場に対する嫌悪感と、自分に押しつけられた支配的観念への憎悪が残るだけだろう。そしてそこから脱け出せないといったもどかしさに身がよじられる思いであろう。

この差別が生んだ人間観、とくにユダヤ人観は、これを普遍的問題として考えればどうか。それは非ユダヤの欧米人が自分のみを普遍とし、その結果としてユダヤ人を特性視することになる。ここでは人間が人間に対立

する。ところがこれは日本人にとっても無縁の問題ではないだろう。言葉をかえて言えば、こうした人間観はアジア、第三世界を特殊と見なすことでもあろう。ヨーロッパに残る根強い反ユダヤ主義は実は欧米の植民地主義とアジアの問題であらうからである。ということは欧米人のユダヤ人観は日本人にとって対岸の問題でないということである。この点は重要でありながら、それを軽く見たきらいが残存していること、そしてこの問題軽視こそが逆に日本の対世界、対欧米の意識を従属的なものとし、かつそれに対する本質追求を怠る結果となり勝ちなことを心痛せざるを得ない。

この点についてアラブ近代史研究者板垣雄三氏は欧米のアジア観を批判して「歴史学研究」で明言している。<sup>(注4)</sup>

(注1) Nun hatte sie die beiden gebunden liegend in ihrer Grotte, die scharfen Schnüre schnitten ihnen ins Fleisch.... (S. 15). ... Sie suchte nach einem Bewußtsein, das ihr Dasein erklären könnte.... (S. 16)

(注2) Janna sah, wie der Vater und der Junge um sie kämpften. Sie war lebendig gebunden vor den erhobenen Gewehrläufen, die alle auf ihr Herz zielten. Um ihre Befreiung kämpften die beiden Rivalen auf diesem Jahrmarkt. Das Karussell hatten sie umgeworfen, sie rangen miteinander in gewaltsamen Anläufen und zurückweichenden Bewegungen, ihre Jacken waren heruntergerissen und die Hemden zerfetzt, ihre nackten Oberkörper schlugen klatschend zusammen und lösten sich voneinander mit einem saugenden Geräusch. Mal sah Janna des Vaters fettige grauzottige Brust obenauf, mal Gregors braunen glatten Brustkorb, und immer hielt sie mit dem, der gerade unten lag. Sie war angefüllt mit einem siedenden Wollustgefühl. (S. 21)

(注3) ..., und die Realität der Bewohner bestand aus seinen eigenen Reaktionen, sie waren aus ihrer Wirklichkeit herausgezogen, er aber fühlte ihre Nähe fast körperlich. (S. 23)

Er war in ein Drama versetzt worden, das ihn nichts anging und ihn trotzdem verstrickte in eine Unruhe und Verwirrung. ...., er hatte mit Gestalten erdichteter Welten gelebt, jetzt begann das Leben kompakt und üppig zu werden, näherte sich ihm mit Ansprüchen und Forderungen, die er nicht erfüllen konnte. (S. 24)

(注4) イスラエル国家の位置づけ——〈欧米〉の〈アジア〉観批判

〈アジア〉のひろがりということを考えていく上でどうしても避けて通れない問題としてイスラエル国家の位置づけの問題を次にとりあげることにする。

我々が『アジア近現代史』を書くのだとすれば、イスラエル国家および社会をどこでどのように扱うのか、という問題から、逆に我々のいう〈アジア〉を問題にしたいのである。そのことは、つまり〈ユダヤ人〉をどう扱うかという問題、そしてさらには、欧米のアジア観への批判にもかかわっていかざるをえない。パレスチナ問題やシオニズム・イスラエルについて考えることは、ただちに欧米のユダヤ人問題、アンティ・セミティズムを批判し、そしてヨーロッパ内部での「東方」的要素としての〈ユダヤ人〉を標的にし、またそれに媒介された〈アジア〉認識にまでメスを入れることを不可避のものとし、我々が問題とすべき〈アジア〉の議論の中にどうしても欧米の歴史的な社会への理論的見通しをまで包みこまなければならぬとされるのである。この点ではヨーロッパ人のアジア観などという従来の議論をかなり抜本的に批判しなければならない。一方ではマルコ・ポーロから、他方では啓蒙思想などから始まるような議論のスタイルが余りにも多く、この面でもヨーロッパの反ユダヤ主義に感染しているからである。西ヨーロッパと東ヨーロッパではかなり条件がちがうが、それにしても、ともかくヨーロッパなり欧米の側で〈アジア〉、〈アジア人〉を問題とする時、そのことはいやおうなしに、自らの社会の中に存在するユダヤ教徒あるいはユダヤ教を通じてしかできなかつたという事情がかくされている。このことは逆に〈ヨーロッパ〉の側にめり込んでいた〈アジア〉的要素、〈アジア〉的カルチュアという問題につながり、そしてさらに、現実の問題としては、もう一回逆に欧米の植民地主義として〈アジア〉の側に押し込まれてきたイスラエル国家という問題につながるのである。現代イスラエルを論じるためには〈補論〉とか〈背景〉説明としてではなく、ストレートに合衆国の政治・社会構造やソビエト社会の動向を書き込まなければならぬとされるのである。これまでの講座準備のための実務的議論を聞いていて、なんとなく地理的〈アジア〉ということ安易に考えられすぎているように思ったので、また若くして個別専門家化した中国史・朝鮮史・インド史……研究者らが「専門」的仕事を書きならべるといふ単純協業によって〈アジア〉史ができるというようなことになっては困るので、あえてこの問題をたててみた次第である。

我々の〈アジア〉観というものに、ユダヤ教やユダヤ教徒への見方を媒介として形成されたヨーロッパ的〈アジア〉観の枠組みが意外に大きく影響しているのではないかという気がする。このことを批判し直す作業は、我々の〈民族〉理論〈人種〉、理論批判などへの理論的アプローチをあらためてよびさまさずにはおかないし、さらに、それはマルクス主義および社会主義革命の歴史的意義づけにも新しい視野を与えるものであることはいままでもない。そしてそれは社会的差別への世界史的観点をもあらためて要求することになるのである。

—（「歴史学研究 第429号「アジアという地域への実務的アプローチ」板垣雄三）—

## Ⅲ

作品ではローベルトは勤務先の在庫品室にいる。そこから社長室に行くには巨船の通路を通る。歩行する時の彼には「自分の名前」はない。そして仕事の全部は船長によって決定されている。<sup>(註1)</sup>船長という絶対的な存在とその環境下でつねに敗北感をいなくローベルトが共存している。絶対主義的人間支配は揺ぎもしない。この確定した絶対性は観念論的なものではない。もし絶対性が政治権力の形態で存在しているときは中央集権的支配となり、それ自体が安全性の姿をとる。だが相対的には対立しているものとして存立する。にも拘らず絶対的存在は無制約的に動く。この動きの変化、移行はその体制が無限に独立性を続けることを許さない。ただ現存在としては絶対が実在として作用する。ローベルトは正にそうした条件の下で生活している。このような空間で他者と自己とはどんな関係にあるだろうか。

他者と私が別個の主観性を持つためには他者と私とを同じく類比化し、他者をも主観として構築するほかないだろう。他者と自我が超越的な主観性を持ち共同体を作る。その場合両者の差異は忘れられて人間主観は超越的な内部でのみ可能となろう。とすればこの人間観は無制約な、従って歴史のないものによって誕生した理念ではないか、との疑問が生ずる。かかる場で働く場合、主観的理性は働くことが出来る。だから主観的な理性においてのみ人間解釈が成り立つ。それは本来の人間観であろうか。しかし社会的所産としての市民性はなくなってくるから人間解釈は非科学的なものにならざるを得なくなる。そしてドグマ的考察が通用し易くなろう。

ローベルトの生活の場は、こうしたところにあるが自分の力だけでその非理性・非合理は解決できるものではないだろう。ここに差別された側の人間ローベルトがいる。この作中の人物を、こうした理性の光で観むとすれば、この作品は私小説的なものが描いた人間の動きではない。私は私にとっての私、私の視点でのみ私を見る、といったのではどれだけ人間に迫り得よう。私の背後には私の限界の根源があり、その私の限界打破のため



には差別解明をするということの指示性が現われる。この点からしても作品における若者の登場はただの青春謳歌といったものではなく、亡命者としての冷厳な眼による人間登場である。

そうしてこれが人間内部のみでなく外部に向けられたときには政治的なものとなる。ところで同じユダヤ人作家であるF. カフカにあってはどうかであったか。P. ヴァイスは自伝的作品でカフカについてつぎのように述べている。

Kafka stand vor dieser Mauer, an der er sich schließlich zerschlug, er rannte immer wieder gegen diese Mauer an, (Fluchtpunkt: S. 99)

カフカはこの壁の前に立った。その壁で彼は結局はつぶれた。彼はこの壁に向かって何度も突進した。

Die Welt, in der ich mit Kafka im Zwiegespräch stand, erhielt den Todesstoß....Kafka hatte nie gewagt, die Urteilsprüche der Richter zu revidieren, er hatte die Übermacht verherrlicht und sich ständig vor ihr gedemütigt. ...Bei Kafka war alles von der Furcht vor Berührungen durchsetzt. Sein Schmerz lag im Gedanklichen, er schilderte den Kampf der Ideen, ...und immer wieder hatte er das Unerreichbare, das Unmögliche vor sich. (Fluchtpunkt: S. 164f)

わたしがカフカと対話を交わした世界は止どめの一撃を食った。……カフカは裁判官の判決を再審に持って行こうとすることをしなかった。カフカは超大な力を賛美し、いつでもその力の前に卑下した。……カフカにあっては全てが接触への恐怖で一貫していた。彼の苦痛は思想的なものの中にあつた。彼は諸理念の闘いを敘述した……そしていつも眼前にある到達し難いもの、不可能なものを持っていた。

以上はヴァイスが自分のカフカ観を簡単に述べたにすぎないにしろ、ここにはカフカとヴァイスの差がある。カフカは不平不満を胸にしまって、それが独りで胸中で動き回った感がある。つまり人間を感性的な活動の場でも捉えず狭ばめられた生活、規定した意識の中に沈ませたのではないか、という点をヴァイスは突いているように思えてくる。ヴァイスは少なくとも意識は、意識された存在であることと思考したのに対し、カフカはそれ

から抜け出せなかった。ということは、ヴァイスもカフカと同じ境遇に出くわしている。たとえば――

Als ich in Prag wohnte, der Stadt, in der Josef K. um sein Leben kämpfte, war mir der Prozeß zu nah, als daß ich ihn hätte erkennen können. Was ich erfuhr, war nur die Unmöglichkeit und Ausweglosigkeit, obgleich mir scheinbar jede Freiheit gegeben war. (Fluchtpunkt. S. 57)

ヨーゼフ・Kが自分の生命のために闘った町、プラハにわたしが住んでいたとき、審判は、余りにも身近にあったので、私はそれを認識できぬ程だった。見た目にはどんな自由もわたしには与えられていたものの、わたしが経験したものの、それは不可能と行き詰りばかりだった。

ところがヴァイスは眼を外部にも積極的に向けた。そうして「追究」Die Vermittlung (1965)「ルシタニア怪物の歌」Gesang vom lusitanischen Popanz (1966)「ベトナム討論」Vietnam Diskurs (1966～67)「亡命のトロツキー」Trotzki im Exil (1969)を著わした。人間の背後のものを、より強く具体的に追論した。さらに進んで「抵抗の美学」Die Ästhetik des Widerstand (Suhrkamp 1975)で作者の分身と見らた主人公がスペイン人民戦線側に立つロマンに展開する。人間生活における光と影、肯定と否定、生と死、上と下、支配と被支配という両極に迫った。現実的な歴史の地盤を見るだけでない。現実的なものを自己意識に解消して事足れり、としていない。だから人生論的作品にあっても人種偏見を普遍的なものとするのは幻想形態と見なしている。

眼を作品に移すとグレゴールは黙々と仕事をするものの、それは鞭の下で働く奴隷に過ぎないと思ってくる。魔法により外界から遮断され孤立化を余儀なくされた「魔法にかけられた孤立」verhexte Isolierungの中での仕事である。そうでありながら大地 Festland を求めて止まない。それでも生きようとする力は失っていない。その故かグレゴールはレアに対しては自己放棄的なものさえ持続させて生きている。それは一面から見れば彼の理性でもあった。そうして自ら自分の顔に描いた悪を本来の顔として生きて行こうとする。<sup>(註2)</sup>自分の顔に別な顔がつけられること、これは一

種の分身 *Doppelgänger* である。自分とは正反対のものをして顔に生きる。意識の二重性であり、人間存在の中の二元論—善と悪、神性と魔性がある。そして何かを怖れる。それは死の接近であろう。<sup>(注3)</sup>内と外との分裂が拡大し、両者が止揚されない。この分裂が内的世界にそのまま指向されるならあるいは恐怖、恍惚そして精神的廢墟の中に没するだろう。またそれを、自己認識のプロセスとなす力に転化できれば、それは具体的な対象の真実把握に向かう一段階ともなるが、そのためには合理的な追究を持続しなければ無力であろう。世界の存在を制約的なものを前提として見るだけなら追究力は衰える。この点も作中人物の背後かくれている課題であろう。混沌たる世界の中に青春を過ごした作者の訴えるものがここにも控えているように思える。つまり自己をとり巻く出口のないような強さ、その中で作家の課題は歪曲のもとにおいて真実を追及することではないだろうか。哲学の問題でなく生存の問題である。切断された生活環境における真実への探求であろう。（この点についてはP. ヴァイス「分割された世界における作家活動についての十章 9.」—1965. 参照）

グレゴールの女友達ヤンナは犬とも遊び、かつては怖がっていた犬と格闘する。その結果、異教徒の強靱さを保有するに至る。彼女は自分の住んでいる世界を自分のものと思うが、その所有物視されたものは塔、屋敷、橋、建物などである。個人所有感覚とは離れた意識である。グレゴールは地誌学研究を一步前進させようとし、自己と全体的なものを別世界と思い、自分の中に閉じこもってしまう。ヤンナと比べれば木と粘土で出来上がった人間にすぎない。研究に打ち込みながらもその不毛性は明らかである。しかもなお研究を続ける人間の姿がここにある。一方ヤンナは、かつては魔法にかけられ永劫の罪 *Verdammung* の中に生きていたが、もう純潔を取り戻している。意識の世界に変化が生じた結果であろう。そうして「不可能という無意味な空間から」 *durch den leeren Raum des Unmöglichen* ただ一つの可能性に行きつくこと、それは身体が抱き合うことだと叫ぶ。死の恐怖と生の不安が織りなした生と死の叫びであろう。

人間が絶対絶命的なもの、自己存在の生否をかけた場面に直面したとき、

自己存在の証明は肉体であるということの論証であろうか。たとえば世紀末的な騒ぎはその変種でもあろう。ただ狂的な姿を意識しているか否かの違いはある。狂的人間、それは押しつけられた生活体験のグロテスク化ではないだろうか。狂的仮装者は頭脳における狂気を求めるだけだが、本当の狂人との外的表現は同一である。この肉体に自己証明を賭けたということは、もとより意識しての上である。

グレゴールは相も変わらず迷路から脱出していない。恐怖心が彼を捉えて離さないからである。<sup>(註1)</sup>それは小市民的な狡さが残っているからではないか。人間の狡智といえはそれまでだが、グレゴールの狡智は「見られずに見ること」(75頁)を望んでいることから、なおその小市民性と勇氣欠乏の姿が浮き彫りにされるのである。これは人生途上の一見無意味な時間であるが、経験せざるを得ない一路程であろうか。ヴァイス自身も自己告白的作品「両親との別れ」Abschied von den Eltern でつぎのように記している。

Meine Niederlage war nicht die Niederlage des Emigranten vor den Schwierigkeiten des Daseins im Exil, sondern die Niederlage dessen, der es nicht wagt, sich von seiner Gebundenheit zu befreien. Die Emigration hatte mich nichts gelehrt. Die Emigration war für mich nur die Bestätigung einer Unzugehörigkeit, die ich von frühster Kindheit an erfahren hatte. Einen heimischen Boden hatte ich nie besessen....Diese Zeit war eine Wartezeit für mich, eine Zeit des Schlafwandels. (Abschied von den Eltern: S. 143)

私の敗北は亡命生活の困難を前にした亡命者の敗北でなく、束縛状態から脱出しようとする勇氣のなさの敗北だった。亡命が私に教えてくれたものは何もなかった。私にとって亡命とは、幼少期に経験したもの、何ものにも帰属していないということの確認にすぎなかった。故郷の大地を一片も所有したことはなかった。……この時期は私にとっては待つ時間であり、夢遊歩行の時であった。

(註1) Auf dem Weg dorthin ging er durch einen großen Ozeandampfer, er trug nicht seinen eigenen Namen, er gehörte zur anonymen Mannschaft, er ging durch das rollende stampfende Schiff zur Kommandobrücke. Aber vor dem Kapitän war alles bestimmt, alles ein für allemal festgelegt,...Vor dem Kapitän sank er nieder in seine

Vernichtung, die sonst der Lebensgrund war, der ihn trug. (S. 27. f)

(注2) Er wollte das Bild reinhalten, aber ständig wurde das Bild besudelt, er konnte die Schönheit ihres Gesichts nicht bewahren, es wurde von Ungeziefer übersät, von Lepra gegeberbt, die Macht, die ihren Körper entstellte, war in ihm... (S. 48)

Er mußte das Böse im eigenen Gesicht tragen, niemals könnte er sein eigenes Gesicht loswerden... er wollte sich von seinem Namen befreien, sich in eine andere Existenz hieneisuchen. (S. 58)

(注3) Da wußte er plötzlich, was das war, was er in sich hatte, wovor er sich fürchtete. Der Tod. Das war es, wohin er die ganze Zeit gegangen war, um endlich einen Punkt zu erreichen, von dem es kein Fortsetzen mehr gab, .. (S. 60)

fühlte eher eine Zähigkeit, eine Ausdauer, der Tod konnte ihr nichts anhaben, es war, als hätte sie ihn überwunden, es war etwas Hartes und Forschendes in ihrem Blick. (S. 66)

(注4) Er wußte nicht, daß seine Furcht vor der Weiterbewegung die Furcht *zu wissen* war, .... seine Empfindungen waren in Gregor, es war Gregor, der *sah* und der *hörte*, er selbst war unsichtbar. Er hatte die Welt zu einem Puppentheater zusammenschrumpfen lassen, bedrohlich war sie nur noch in ihrer Unwirklichkeit. (S. 72. f)

Von seinem Horchposten im Labyrinth kam er zurück zum Ozean-schiff. (S. 73)

Seine Selbsttauschung verlieh ihm eine Machtstellung. Es war, als besäße er das Leben derer, an die er sich herangepircht hatte ..... sie ahnten nichts von der Nähe des Jägers.

Sehen, ohne selbst gesehen zu werden, das war seine letzte Stärke.. (S. 75)

#### IV

グレゴールとレアは最早や互いが動かされ合うことは少しもないほど疎遠になってくる。男は状況を公式的に観察するだけで、この方式から自己の姿さえ見失ってくる。レアは教条主義の誤まりを持ち、流動するものに対して、固定的にしか捉えない方法の認識限界を訴えている。そこには古い世界にしがみついている人間の姿がある。だが新しい世界は何処にあるか。<sup>(GE 1)</sup> 新世界はユートピアではない。Die Zukunft war Utopie, wenn sie nicht aus der Vergangenheit kam. (S. 81) は何を言おうとして

いるのだろう。ユートピアなる空想世界は人間の頭の中で簡単に出来上がる。彼女はそれに対して一種の嘲笑を懐いている。つまり過去と切断されたものに理想国を夢みること、空想性しかないものの愚かしさを忘れてはいない。ヴァイスはユートピア観について「消点」で――

Jetzt aber war der Krieg seit mehr als einem Jahr zu Ende, neue Feindlichkeit lud sich auf, das freie, unbehinderte Umherwandern blieb eine Utopie, und ich mußte mich für eine Bleibe, einen neuen Ausgangspunkt, entscheiden. (Fluchtpunkt. S. 161)

戦争が終わって1年以上も経ったいま、新しい敵意が積み上げられ自由な、妨害もない放浪は一つのユートピアにとどまった。そして私は一つの滞在、一つの出発点をわれとわが身に決めねばならなかった。

と書いている。諦念も空想性に似ている観念であろう。それこそ古き文明の所産観念で、これを背負ったのがグレゴールである。閉鎖的社会に住み、思弁の社会の住人にふさわしい態度をとる学者グレゴールと開放的なレアの対比がくっきりとしてくる。地誌学者グレゴールの研究は Phantasmagorie「幻覚」<sup>(注2)</sup>であり、自分の思案は所詮灰に等しいということ<sup>(注3)</sup>でレアは父と争っている。互いが準禁治産者と言い合う始末である。そうしてレアは亡命生活の中で自己の自由を築こうとする<sup>(注4)</sup>。この亡命こそ作者ヴァイスが体験したものであったし、同時にユダヤ人一般の問題であったのだ。この歴史的現実。それに挑戦することは社会生活において自己疎外されたものへの否定性であった。同時に社会の中に自己存在を否定するよう<sup>(注4)</sup>に迫る実在が内在しているということであった。この実在の波をまともに受けた人間の人生回想こそこの作品の出発点であったのである。そうした人生につきまとう移住、亡命がその人間の生活に暗影を投げかける。作中人物のレアは亡命生活の中で自由を学ぶ。ここで自由と非自由の問題が生ずる。

一体自由とは具体的には何であるか。社会生活から離れた自由、歴史的必然性のない自由は、抽象的なものにすぎない。レアが求め学んだものは

俗世間が当然視していた束縛からの離脱であったとも思える。だが自由の求め方はどうだったか。sie schlug auf sich selbst ein (S.92)「彼女が殴りかかる相手は自分自身だった」ことは、狂気にまで進む敵対心理ではなかつたらうか。それ自体の中にめり込んでしまった姿で、事は解明されそうにもない。ただ殴ることが自己目的化している。それは危険性を伴ってくる。

男は死に瀕した理想と幻想の中に逃げようとしている。このくだりは閉鎖社会の人間が陥り易いのが逃避的態度であり、人間的なもろさを具有していることを教えている。<sup>(注5)</sup>男は女が苦痛を体験して獲得したもの以上のものを得ているとは考えられないのである。男は研究を続けるが、それだけでは空虚感恐怖感は解消しない。こうした男にとって呪文に似たものの中に住むことが一つの救いとなる。かくて男の中で死ぬのは文化である。自分に迫ってくる恐怖と憎悪の動機を理解することなく生活は続けられようとする。<sup>(注6)</sup>それは没落者 *Untergehender* であった。

ここで没落者と自己規定しているが、これはニーチェが概念づけした没落者の意ではないだろうか。それにつながった人間を指しているのではないかと想われる。ニーチェにあっては自分を没落者と自認して没落に向かう人間は、そのとき生きる術を知っている者である。「ツァラトストラ序言」においてそれが納得できるのではないだろうか。ただ、ニーチェの場合、その哲学は英国に比べ遅れをとったドイツ産業革命との対決があり、Weiss はニーチェの非合理的一面を容認するものではないだろう。

Was groß ist am Menschen, das ist, daß er eine Brücke und kein Zweck ist: was geliebt werden, kann am Menschen, das ist, daß er ein *Übergang* und ein *Untergang* ist. (Nietzsche, Zarathustras Vorrede 4)

人間において偉大な点は、かれがひとつの橋であって、目的ではないことだ。  
人間において愛しうる点は、かれが過渡であり、没落であるということである。  
(手塚富雄訳、中央公論社刊「世界の名著」)

Ich liebe Die, welche nicht zu leben wissen, es sei denn als

Untergehenden, denn es sind die Hinübergehenden. (ク)

わたしは愛する、没落する者として生きるほかには、生きるすべをもたない者たちを。それはかなたを目ざして超えてゆく者だからである。

ツァラトストラは高きものに向かって進む人間に対し自己忘却を強調するが、そのとき「一切の事物は彼の没落となる」。それは現在の不完全性の故の没落であり逃避とは反対のものである。ニーチェの没落者は没自我的に大いなる徳に向かって進む人間のことである。そこでは人々の妬み、憎しみは亡びて行く。だが自己の人間的な、余りに人間的な状態を自ら非難せざるを得なくなり、自己批判から神をこらしめることへと転換し、ついには神の怒りで滅びる。それでも「没落者」の行為は神に対する愛の故である。そうして努力する人は救われる、という見方も兼ねている。

グレゴールは、この種に属しようと努力している型であったろうか。自分の塔の中に閉じこもって自分の源泉に辿りつこうとする。だが源泉を求めるところでは論理、経験、思考に加えて闘う意志を必要としていた。<sup>(注7)</sup>彼はついに自分の乗っている足場が崩れればよいとさえ思う。この願望は虚無的であり、物事を一挙に解決しようとするのと裏ハラであろう。それは急進的な心理であり自分の人生も破壊される因も含む。グレゴールは没落者たらんとするが、ついにはニーチェ的没落者とは異なった型のままに止まってしまふ。これこそ正に閉鎖社会の中に留まった結果であろう。その限りでの自己否定は有に転化し得ないのであった。

(注1) Die Sucht, ständig seine Lage zu formieren, ständig den Ausschlag von Seismographnadeln abzulesen und Peilungen vorzunehmen, führte dazu, daß er sich selbst aus der Sicht verlor....Er haßte sie, weil sie ihn band, er wünschte, sie möge ihn verlassen, daß er sich ganz dem Schmerz hingeben könnte....er wußte, die alte Welt, an der er noch festgeklammert hing, mußte zerbrochen werden. (S. 76)

(注2) Die Arbeit war eine Phantasmagorie, die Arbeit verwehte vor einem Gesicht. (S. 86)

(注3) Der Vater sagte, ich kann dein Bankkonto sperren lassen, wenn ich will, kann ich dich entmündigen, du kannst keine Verantwortung tragen.... (S. 91)



- (注4) Sie wollte eine Freiheit errichten im Exil, aber ihre Wirklichkeit war zerfließend, sie konnte das Spukhafte, den Fluch nicht loswerden...und sie war die Zerstörungssucht, die alles, was wachsen wollte, verschlang. Sie schlug auf sich selbst ein...Sie floh zu Gregor. Der fürchtete sich vor ihrem Entsetzen. (S.92)
- (注5) ..versuchte er eine Weile, sich hinter erstorbenen Idealen und Illusionen zu verschanzen, er kroch in sich zusammen hinter Schutzwänden, die sie mit einer Regung der Hand, einem Stoß ihres Fußes umwarf ihr Revoltieren war berechtigt, es war immerhin besser als seine ängstliche Zurückhaltung...er hatte nur beobachtet, nie erlebt, er war ein Untersucher, ein Abwäger. (S.93f)
- (注6) Nie hatte ihm die Arbeit Befriedigung gegeben...so mußte er zuerst die falschen Voraussetzungen seiner Arbeit wegschneiden. Mußte den Schnitt wagen, in seine Produktivität hinenin,...Vielleicht gab es völlig neue Ausdruckenformen unter der Verfilztheit. Er war ein Untergehender, ein Sterbender, es war eine Kultur, die in ihm starb. Er war ein Wrackstück, doch ausgerüstet mit eigenem Willen... es galt, seinem menschlichen Zusammenbruch nicht auszuweichen, ihn durchzustehen und sich dabei gleichzeitig zu revidieren, die Motive der Furcht, des Hasses, der Destruktivität verstehen zu lernen. Es war schwerer, Klarheit zu suchen, als im Dunkel zu leben. Doch wenn etwas ihn auch ständig hinabziehen wollte, mußte er den Weg des Bewußtseins fortsetzen. (S.100)
- (注7) Stehend ein seinem Glasturm, Leuchtturm, versuchte er, an seinen Ursprung heranzugelangen...Noch wollte er an sich herankommen mit Logik, mit alten Erfahrungen. ...seine gewaltsame Anstrengung war mehr noch eine Anstrengung, dagegen anzukämpfen. Nicht Anstrengung würde ihn weiterführen können, sondern Verzicht auf Anstrengung. (S.103)

## V

グレゴールは虚無的な思いに沈む人間の像である。彼は自分に問う。闘うか、屈服するか、逃げるか、没落するか、崩れ落ちる世界の中で生きるのか？ この問いは彼の住む実体への問いである。その答えは何の媒介もなく啓示され得るものではなかろう。私哲学的なものとして解明する態度では進展しない。現実的な歴史的な地盤からの解き起こしが認識を正しくさせるだろう。<sup>(註1)</sup> そうしてこの亡命、そしてグレゴールの立場も明々白々になろう。そうでないならグレゴールは相も変わらず閉鎖の中に身も心も置き続けるのではないか。

ローベルトは依然として在庫係として働いている。彼にとってレアは靈的存在になっている。そうして彼女の背後には鷲がいるのだ。この鷲という発想。これはさきの没落者という観念を併わせ考えると、ここでもニーチェのツァラトストラ序言との関連が考えられる。

du(großes Gestirn) würdest deines Lichtes und dieses Weges statt geworden sein, ohne mich, meinen Adler und meine Schlange. (Zarathustras Vorrede I)

もしそこにわたしの鷲と蛇とがいなかったら、おまえはおまえの光とおまえの歩みとに倦み疲れたことであろう。

またツァラトストラが没落を始めるとき、鷲が飛んでいることも示唆的であるが、さらに

Und siehe! Ein Adler zog in weiten Kriesen durch die Luft, und an ihm hieng eine Schlange, nicht einer Beute gleich, sondern einer Freundin. (Zarathustras Vorrede X)

と見よ。一羽の鷲が大いなる輪を描いて空中を舞っていた。そしてその鷲には一匹の蛇がまつわっていた。鷲の獲物ではなく、友であるように見えた。

在来の神を否定し勇猛心をもって進んだ人間像をこの小市民的人物に對置させているのが伝わってくるようである。(この個所のニーチェはナチスに取り入れられた、つまりファシズム哲学につぎはぎされて用立てされたニーチェのツァラトストラでなく、過去を乗り越えようとしたニーチェであり、保守的なニーチェではないと考える)

ローベルトは自分の人生が崩れるのを感知するが、それは自分のそれまでの生き方の貧困性と荒廃を知ったためであった。<sup>(注2)</sup>

レアは一見すると開放的なのに狂暴化した心理の渦流の中にいる。それは恐怖心から由来したのであった。それを自認したとき敗北感を残す。そうして憎悪感が自分を麻痺状態に転じさせたものと悟る。ここでは精神的手術があった。<sup>(注3)</sup> 自分一人が残り得るような世界は死の世界である。孤独が社会的普遍性を持ち得ないことからレアの精神的变化は理解できる。そうしてレアは小心翼翼たるグレゴールと袂をわかち。筋はグレゴールが

駅のベンチで寝る場面へと進む。このとき、夢の中で彼は自分が囚人の列中にいるのを見る。囚人は武器を持つ人間にこづかれ抵抗者は殺される。グレゴールはその列から逃がれる。この夢は現実の裏返しであろうか。夢見る者の見た疎外世界—幻想を見るようである。グレゴールはこうした恐怖と強圧の下で生き続けられるかどうかを探って行く。<sup>(注4)</sup>そうした孤独感にさいなまされた人間の反省と、それから脱出するという問題を残す。そうした自己解放・自己救済には連繋が必要であることを匂わせているのであろう。そうした連繋感に辿りつくまでには孤立をも止むを得ぬ時がある、という視座を捨てなかったのであろう。対立は矛盾であり、その対立は同一性を臆したものであったのだった。

この作品には犬・獣と人間、母権社会の中に生きてるような女性、人種問題、また死せる老人を夢みる人間とかグロテスクな、常識を超えと思える状態もかもし出される。夢みる人間のもつ幻想から漾ってくる混沌たる世界。それは——

Erst jetzt, im Sommer und Herbst 1946, begann ich, etwas vom Wesen des vergangenen Jahrzehnts zu fassen, .. Obgleich es kein Fliehen und kein Exil mehr gab, obgleich ich Bürger eines verschonten Landes war, wurde ich die Vorstellung nicht los, daß ich nirgends mehr hingehörte. (Fluchtpunkt. S. 161)

1946年夏また秋になってやっと私は過ぎし10年間の本質のいくらかを理解しはじめた。……逃げることも亡命もなかったものの、また災害を受けなかった国の市民であったにも拘らず、私は自分がどこにも所属していないという思いから解放されなかった。

から読めるように Jude としての自己存在の自覚、亡命者として根なし草に陥る危険性の中に生きながら、墮さなかった人間、具体的な力の所在を求めた人間の眼を常に潜め、それが、不合理な構造を見抜く力の根源ともなっているのを見る。悲痛と不合理、疎外と自己の位置を見定めて、青春回想を私小説的なものに終わらせなかったのも、また一片の甘い感傷に終わらせなかったのも、正にここに由来しているといえるだろう。

- (注1) 「人間たちの頭脳のなかの模糊たる諸観念といえども、彼らの物質的な、経験的に確かめうる、そして物質的諸前提に結びついた生活過程の必然的昇華物である。こうなると、道徳、宗教、形而上学およびその他のイデオロギーとそれらに照応する意識諸形態はこれまでのようになにか自立したものででもあるかのごとき外見はもはや持ちつづけることはない。……意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定する」(「ドイツ・イデオロギー」真下信一訳 大月書店刊 国民文庫52頁)
- (注2) Endlich geht deine Würde zum Teufel, endlich hstürzt du zusammen unter der Last dienes Verrats an dir selbst. Wie hast du gelebt——welche Armseligkeit, welche Verödung! Er sah sein Leben in Stücke gehn,..(S119)
- (注3) Sie fühle, wie gebrechlich die Kraft war, die sie gewonnen zu haben glaubte. Es war die Furcht, die ihre Angriffe so gewalttätig machte,...der Haß gegen die, die sie unterdrückt hatten, so übermächtig werden, daß er umschlug in tödliche Betäubung. (S.125f)
- Es gibt eine Ebene des Lebens, die ist abgeschlossen im Licht der Wirklichkeit, darunter aber gibt es keine Grenzen.
- Schlafend sah er, was ihm widerfahren war, verwandelt im Licht der Vision. Er gehörte zur Kolonne der Gefangenen,...(S.127f)
- (注4) Würde er Jetzt seine Furcht und sein Alleinsein ertragen können? Würden neue Möglichkeiten erstehen? (S.129)

付記：使用テキストは Suhrkamp taschenbuch „Das Duell“